

研究概要

全体論

研究主題

であう・つながる・うまれる コミュニケーション (第二年次) ～互いの学びが広がる聞き合い～

1. 思考力・判断力・表現力を育む聞き合い

(1) 主題設定の背景

学習指導要領

「生きる力」の育成

平成8年の学習指導要領で示された「生きる力」の育成は、平成20年に告示された学習指導要領の中でも引き続き重視していくことが述べられている。私たちは、日々の実践の中で基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育んでいかななくてはならない。

また、学習指導要領の中で述べられている言語活動の充実など改訂のポイントを踏まえ、日常の教育活動の充実も図っていく必要がある。

一方、本校の児童に目を向けると、以下のような課題を見出すことができる。

本校児童の実態

*研究紀要第60集
H21校内アンケートより

- ・自分で考え判断しようとする姿勢が十分できていない
- ・追究する意欲や根気強さが継続しない
- ・協同的な学習でのかかわりが薄い

前研究との関連

これらの実態を受け、これまで主体的に考え、創造的に生きる力の育成を具現化する授業づくりをめざし研究に取り組んできた。

過去4年間取り組んだ「知識創造の力を育む授業」の研究・実践では、個の思考にかかわりが重要な役割を果たしていることを明らかにしてきた。かかわりは、学びの主体化や相互作用の活性化、学習の高まりを伴いながら学びのプロセスを充実させていくのである。

かかわりの重視

この成果をもとに、かかわりによる学びを集団に広げていくことで、学びがさらに充実し、一人一人の力もさらに高まっていくと考えられる。つまり、子ども同士がたえずかかわり合い、思考が連続する学習活動を展開していくことで、子どもの思考力・判断力・表現力をより効果的に育んでいくことができるのである。

研究の方向

そこで本研究では、かかわりを引き続き重視し、話し合い聞き合う力をつけ、集団での学びの向上に取り組んでいく。そして、子ども同士がかかわり合い、思考力・判断力・表現力を育成していく学習活動を模索していくことを研究の目的としていく。

平成20年に告示された学習指導要領実施の年を迎え、私達はこれまで以上に改訂のポイントの一つである「習得した知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力の育成」を重視していくことにしたのである。

(2) 重視する思考力・判断力・表現力

学校教育法第30条第2項

生涯こわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して

思考力・判断力・表現力は、「生涯にわたり学習する基盤」を培い、「習得した基礎的な知識及び技能を活用して課題を解決する」ために必要な力である。この力は、問題解決的な学習活動の中で培われていくものである。

本校では、思考力・判断力・表現力について、以下の点に焦点をあて力を育んでいく。

【思考力】

- ・生活経験や学習活動などを通して得た知識を基に、課題解決に向けて、比較・分類・関連・類推し、新たな知識を発見・獲得する力

課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならぬ

【判断力】

- ・生活経験や学習活動などの中から、課題解決のために必要な知識を抽出
- ・選択する力

【表現力】

- ・生活経験や学習活動などを通して獲得した知識に基づき、課題解決に向け、自分の思いや考えを説明する力

思考力・判断力・表現力を焦点化し、学習活動の中の各場面において、学年の発達や教科などに応じて、細分化し、具体的な力としてとらえていくことで、たしかな力としての定着を図ることができると考えている。

(3) かかわりの重視

思いや考え
事物や事象に対し、思いは主観的なものであり、考えは客観的なものととらえとる

かかわりは、新たな知識や技能、見方や考え方に気づき、自分の知識や技能、見方や考え方を新たなものにする。ここで述べるかかわりとは、自分の考えを伝える、相手の思いや考えを受けとめるといった直接的なかかわりをさしている。

私達がかかわりを重視するのは、自分の思いや考えを主張するだけでなく、他の思いや考えを取り入れることによって新たな理解に至ることをふまえ、かかわりにが思考力・判断力・表現力をより育むと考えるからである。

そこで私たちはめざす子どもの姿を以下のようにとらえ、その姿が具現化される活動を求めていくことにした。

めざす子どもの姿

主体的・協同的に学習に取り組み、獲得した知識をさらに生かしていく力をより高めていく姿

【低学年】

- ・気づきを言葉で伝え合い、視点を意識してくらべ・仲間分けすることで、他の気づきを自分の考えにいかしていく姿

【中学年】

- ・視点を意識した話し合いの中で、比較・試行・関連づけし、出てきた反応を自分の考えにつなげていく姿

【高学年】

- ・論点を明確にして話し合う中で、自ら情報を選択・判断し、比較・関連づけ・類推しながら思考の再構築をしていく姿

上記のめざす子どもの姿は、理想の子どもの姿ではない。日々の学習の中でたえず実現させていく姿であり、活動の中での子どもの様子と考えている。

(4) であう・つながる・うまれるコミュニケーション

であう・つながる・うまれるは、順序性をもったものではない。かかわりを通して子どもが思考力・判断力・表現力をつけていく学習活動の様子としてとらえることができる。つまり活動の目的を力の育成と考えたとき、であう・つながる・うまれるは必要な条件である。そのため私たちは、であう・つながる・うまれるを不可分のものとしてとらえている。

本研究では、問題解決的な学習の過程で思考力・判断力・表現力を育む活動を模索していく。

本研究は、子ども同士がかかわり合い、共に高め合ったり深め合ったりする学習活動を模索していくものである。そこで、思考力・判断力・表現力を育む活動の学習場面での働きを、以下のように考えて研究を進めていく。

【学習問題をつかむ】

- ・未知との遭遇（新たな知識や技能→人・もの・こと，見方や考え方を知る・気づく）
- ・学習問題として認識し解決に向けての意欲をもつ

【調べる・考える・ためす】

- ・既知と未知を比較・検討し，共通点や相違点を見いだす
- ・解決に向けて有効な知識を検証する
- ・試行錯誤

【まとめる・仕上げる】

- ・新たな知識・技能の習得
- ・新たな疑問の発見
- ・次の活動への意欲をもつ

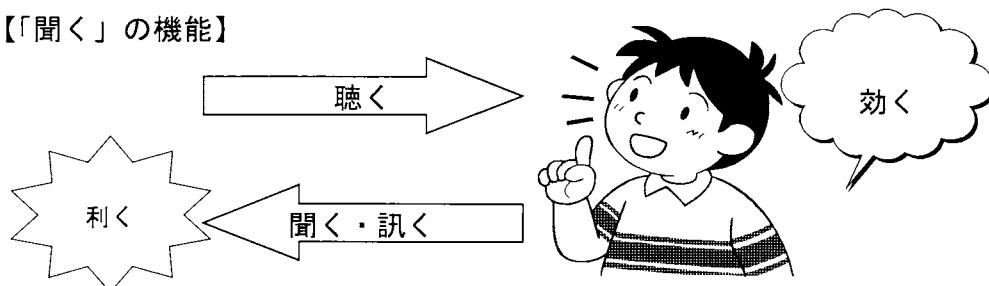
2. 研究副題の設定

(1) 聞く～受けて送る学び～

学習活動の中で，子ども同士がかかわり合う場面は，自分の思いや考えを伝えたり，受け取ったりすることが主な活動となる。本校では，相手の思いや考えを受け，次の発言に生かしていく聞く活動を重視する。

本校では，聞くには以下の五つの機能があるととらえている。

【「聞く」の機能】



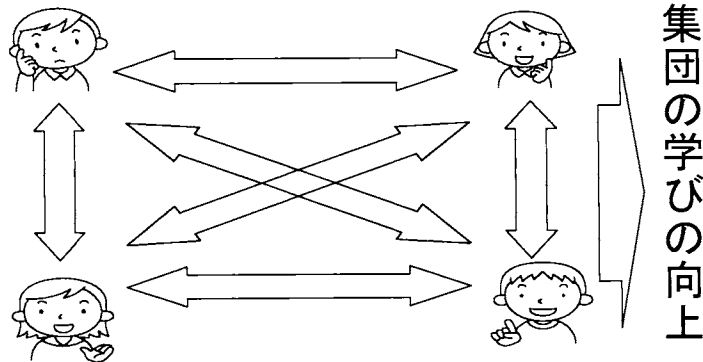
- ・自分の思いや考えについての意見を問う（聞く）
- ・相手の話に耳を傾ける（聴く）
- ・相手の考えに質問する（訊く）
- ・考えの構築に影響を与える（利く）
- ・考えがよりよいものなる（効く）

※様々な「きく」があるが多くが「聞く」を源にしている。本研究では受信だけでなく受信→思考→発信の一連が大切であると考え「聞く」を採用する

個に注目すると，聞くは個の思考に焦点をあてた活動ととらえられる。そこで，双方向に思いや考えを伝え・受け取り・見つめ直す学習活動を聞き合いと定義している。相互に影響を与え合う聞き合いは，問題解決の過程を充実させていき，その学習をくり返し経験させることによって，自らの力を駆使して結論に至る力を培っていくことができると考える。

(2) 副題の設定～聞き合いのある学習活動～

聞き合いは，子ども相互に働きかける互恵的な学習活動である。一方的に話したり聞いたりする活動ではなく，他の思いや考えを受けとめ自分の思いや考えを見直すことにより，互いの学びが向上する。一方的な関係ではなく，互いに発信し合うことにより学習に影響を与えていく。それぞれが影響を与え合うことによって集団としての学びも向上していくと考える。



上記の考えから、今年度は以下の副題を設定し、研究をより深めていくことにする。

研究副題	互いの学びが広がる聞き合い
------	---------------

3. 聞き合い

(1) 聞き合いの働き

聞き合いの働き

思いや考えのやりとりを通して、相手に与える影響。また、活動を通して思考力・判断力・表現力を育ため、焦点化された内容。

一年次の研究で、聞き合いが、思考力・判断力・表現力を育む条件を模索してきた。そして、聞き合いにはいくつかの働きがあることがわかってきた。

聞き合いの働き（例）

- 情報を集める 解を探る 考えの正否を確かめる 考えをもつ
- 考えを共有する 考えを整理する まとめる 分からないことを知る
- つながりを考える 別の考えを探る はっきりさせる 理由づける
- 考えをよりよくする 根拠を確かなものにする 選択する 考えをしぼる
- 様子をとらえる 可能性を検討する 発想を広げる 矛盾を解消する 等

聞き合いは、対象（何のために）、方法（どのように）、結果（どうなる）などを明確にすることで、内容を焦点化できる。焦点化された聞き合いは、活動の目的や思考の筋道が具体的になる。

つまり、聞き合いの働きを明確にし、働きに適した手だてを講じていけば、思考力・判断力・表現力を育む効果的な活動となるのである。

そこで、本年度は聞き合いの働きをもとにした、教師の手だての具体化を図ること、その手だての有用性を検証することを目的に研究を進めることにした。

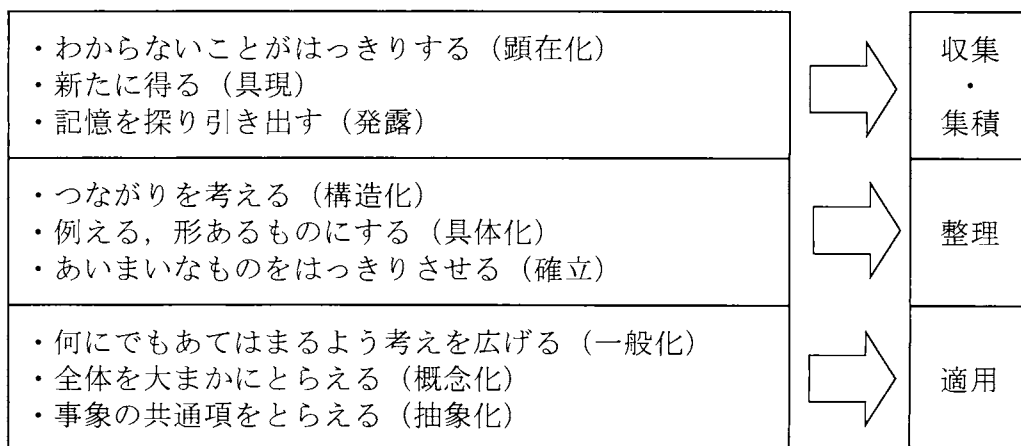
【聞き合いの条件から働きまで】



(2) 問題解決に即した聞き合いの働き

聞き合いの働きを問題解決の場に即してみると、いくつかのまとまりに分類整理することができる。私達は聞き合いの働きを以下のように整理・分類することにした。

【構造化した聞き合いの働き】



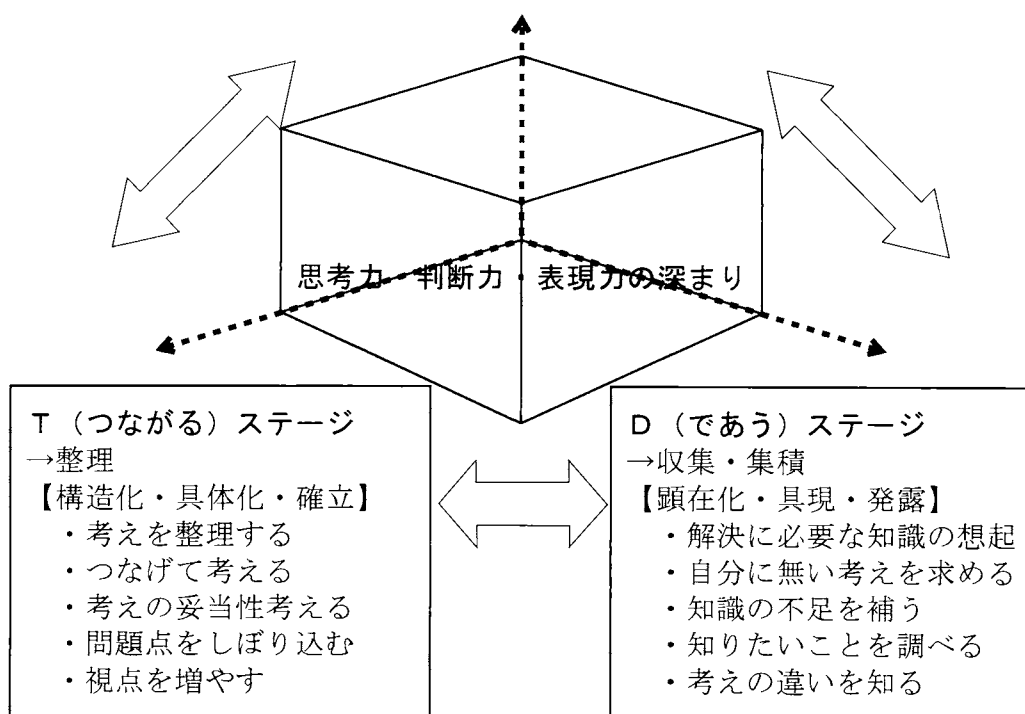
(2) 聞き合いの働きとステージ

ステージ
分類・整理された
聞き合いの働き

より適切な手だてを講じるため，分類・整理した聞き合いの働きをステージとしてとらえ，ステージごとに，効率的，効果的な手だての検証を行っていく。三つのステージの考え方は，以下の通りである。

【聞き合いのステージ】

U（うまれる）ステージ→適用【一般化・概念化・抽象化】
・課題を見いだす ・いかす ・考えをよりよく



① D（である）ステージ

主に問題解決に必要な知識や技能を収集・取得するため（収集・集積）の聞き合いである。

主に収集・集積のための聞き合いである。

具体的な活動として，資料からの情報の抽出や，基礎・基本と成る知識や技能の習得などが考えられる。

② T（つながる）ステージ

主に課題の解決に向けて知識や技能を統合・深化していく（整理）ための聞き

き合いである。

具体的な活動として、学習問題について、互いの思いや考えの共通点や相違を見いだす、自分の考えを見つめ直す等が考えられる。

③U（うまれる）ステージ

知識や技能を他に主に適用のための聞き合いである。

具体的には、問題を発見する、学習を概観し新たな気づきを生むなどの活動が考えられる。

それぞれのステージ(働き)を明確にし、それに応じた手だてを講じることによって思考力・判断力・表現力はより育まれると考える。

聞き合いは、上記のステージも含め不可分の物であり、手だての意識化を図るためにおく重点である。

4. 研究の取り組み

(1) 教科・領域別研究

学習問題の共有や問題解決のための知識や技能を獲得するための場である。

ここでの聞き合いは、資料からの情報の抽出や、基礎・基本と成る知識や技能の習得が主な目的として考えられる。

(内容例)

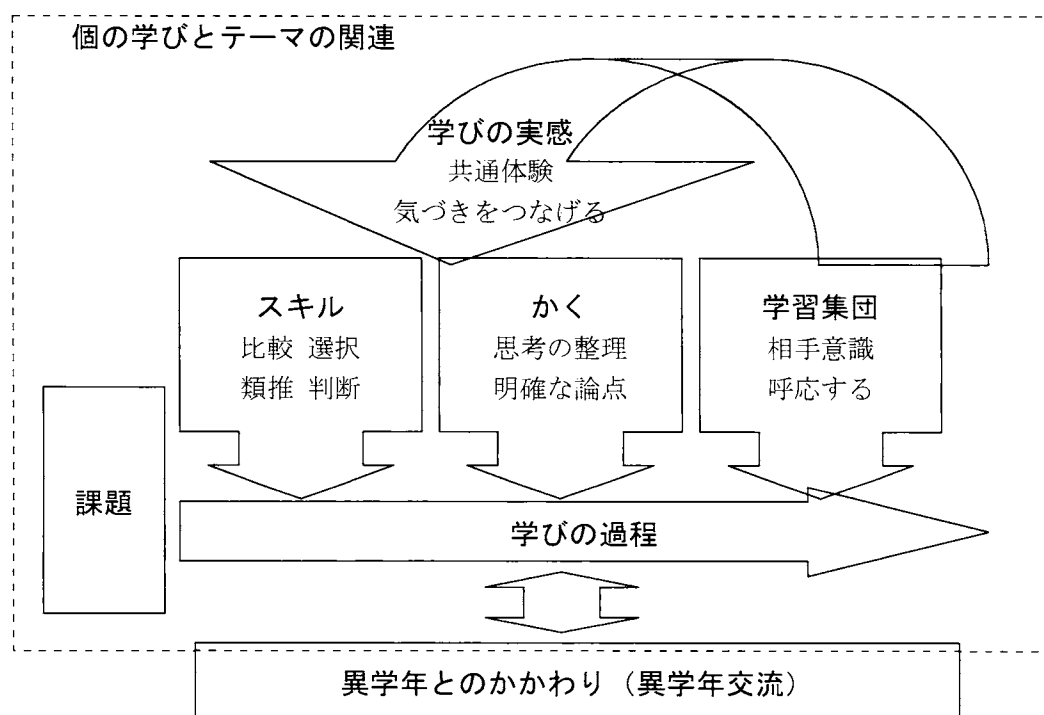
- ・課題をつかむ
- ・事実認識を深める
- ・自分の考えをもつ

(2) テーマ別研究

①テーマ別研究の意図と意義

教科・領域別の研究は、各教科・領域の特性を生かし、学習活動の具体を模索する上で有効である。しかし、昨年一年間、主に教科の学習を中心に研究を進めていく中で、教科に関わらずどの学習にも共通の条件があることがわかってきた。

そこで、学習活動を構成する様々な要素に焦点をあてたテーマを設定し、学年や教科の枠を越えた視点から研究を進めることにした。



今年度は上記の要素に着目し、以下のテーマを設定して研究に取り組んだ。

- ・考えが深まる課題
- ・学びの過程を聞き合いに生かす
- ・学びの過程を見取る
- ・聞き合いに生かすための「かく」
- ・聞き合いがうまれる効果的なグループ
- ・共に伸びる異学年交流

②各テーマの設定理由

【考えが深まる課題】

互いの意見を知る必要感、共に課題を解決する達成感、自分の見方や考え方の広がりをする充実感など、課題が果たす役割は大きい。どのように課題を設定し、子どもに意識づけるか、課題が果たす役割を改めて見つめ直していく。

【学びの過程を聞き合いに生かす】

異なる思いや考えとの出合いが、新たな学びへとつながっていく。思いや考えを共有し、次の学習へと生かしていくための手立てを講じていくことで、聞き合いの学習を支えていく。

【学びの過程を見取る】

聞き合いを考える上で重要なことの一つに自己の変容を感じる事が挙げられる。学習の中で子どもは、自分の思いや考えを伝えたり相手の思いや考えを受け止めたりしながら、学びを重ねている。自らの学びを実感し、思いや考えを見直すための手立てを講じることが必要になる。

【聞き合いに生かすための「かく」】

聞き合いは子どもの思考力・判断力・表現力を育む学習活動である。しかし、音声によるかかわりは、論点がずれたり、誤解が生じることもある。

一方、かくことは、思考の経過を記録する、思考の過程を明らかにする、思考を整理するなどの利点がある。互いの思いや考えを十分に伝え、聞き合いをより豊かにするものとして、かくことについても考えていく必要がある。

【スキルの獲得と活用】

思いや考えを互いに表出しながらも、学習が深まらないことがある。これは、相手の思いや考えを受け取ることができていないと考えることができる。互いの思いや考えを生かしながら学習を深めていく上で、思いや考えを受け止めるためのスキルの獲得も必要である。

【聞き合いがうまれる効果的なグループ】

限られた時間の中で、できるだけ多くの思いや考えに出合うためには、活動に応じた適切な集団構成を考えていくことも大切である。課題や活動に応じ、適切なグループ設定を行うことで、より活発な聞き合いが行われると考える。

【共に伸びる異学年交流】

かかわりによって子どもの思考力・判断力・表現力は育まれる。ならば、学級の枠を越えて、より多くとかかわりを持つことができれば、子どもの力はより育まれると考えることができる。積極的に異学年との交流を行い、互いに学び合うことで、子どもの学習がさらに深まっていくと考えている。